〔 研究区分： 科研費獲得支援 〕

研究テーマ： 出稼ぎ労働者の移動とリゾート文化に関する人類学的研究 ーホストゲスト論の発展的検討	
研究代表者： 地域連携センター 講師・上水流 久彦	連絡先： kamizuru@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：	

【研究概要】

トランスナショナルな時代、ホスト・ゲスト論の枠組みで主に考察されてきた観光の人類学的研究に新たな研究視座を提示することを目的に台湾等で調査を行った。現在、観光産業はホテル等で働く外国人労働者らのよそ者抜きでは成立せず、発展途上国では不均衡な経済・政治の関係を背景に外部資本が観光産業を発展させ、観光産業の担い手は外部資本、ホスト、労働者等よそ者の周辺的外部という重層構造にあった。周辺的外部が観光文化の生成や表象に如何に影響し、その存在や影響がどう隠されているかが今後の課題であった。

【研究内容・成果】

ハワイの観光研究の蓄積が示すように第三世界の著名な観光地は植民地支配を背景とする政治、経済、文化の格差のもと形成されてきた。上水流はこれまで植民地主義やトランスナショナリズムを課題とする科研で台湾、沖縄、パラオ、韓国、日本本土の関係を調査し、ホストとゲストの経済面、政治面での不均衡さを痛感した。だが、ホストとゲストの議論の中で埋没し、観光地でも不可視化されている存在がレストランやホテル、風俗店で働く外国人労働者や、ホスト文化に入り込みその文化を売るよそ者であった。彼らの文化は長い時間をかけてホスト文化の一部になることもある。調査地の観光は彼らのような周辺的外部と外部資本、ホスト社会があり、そこに外からの旅行者が来るかたちで成立している。だが、周辺的外部の研究は不十分であり、周辺的外部の存在に重点を置いた研究が必要だと感じた。

今回の重点研究の基本となった平成２３年度申請の科研では両地域に加え、台湾、韓国（済州）なども含まれていた。そこで沖縄、台湾で現地調査を行った。加えて、それらの観光地において観光客でありつつ、外国人労働者として働く人々を生み出している中国本土、及び韓国人観光客が多い対馬でも調査を行った。

台湾の調査では観光文化の真正性の点から調査を行った。近年は観光の場において外国人労働者が働くことも多い。その場合、観光は見せるホスト側と、ゲストだけの問題ではなくなり、そこにホスト側を演じる外国人労働者の影響という問題が生まれてくる。だが、同時に文化を語る権力はホスト側が持っている。その権力関係の不可視化が明らかにされた。

対馬の調査からはホスト文化側からの観光客（日本本土からの客）が少なく、外国人観光客（対馬では韓国からの客）が多い観光地のひとつとして調査を行った。発展途上国の観光では自国ではなく外国人観光客のための観光地が往々にして存在するためである。その調査からは「歓迎」の意味で行うゲスト文化の要素を使ったホスト側の活動がゲスト側によって「模倣」、「偽物」と評価されない現状が見えてきた。

中国本土の調査では東アジアの文化を扱う研究者との討論を行うと同時に外国人労働者の出身地域から観光産業を考察した。パラオ、シンガポールなどと転戦しながら観光地で働く中国人も多く、韓国では現地語を覚え「タイ」マッサージ師として働くこともあるという。複数の国境をまたぎホスト側で働く外国人労働者の姿が見えてきた。

沖縄調査では沖縄華僑の会長に台湾人留学生などの観光現場の労働状況などについて話を聞いた。会長自身が旅行社を経営しており、沖縄の観光の動向についても情報を得た。

なお、以下の課題を明らかとした。

①ホスト文化の表象への周辺的外部の影響をホスト住民が如何に認識しているか。
②多国籍化する従業者の越境経験は如何なるもので、如何なる構造的要因のもと可能なのか。
③国外旅行、国内旅行の差が旅行者、ホスト住民、周辺的外部の関係に如何に影響を与えるか。

そのうえ、以下の独自な議論を観光人類学に持ち込むことが可能となった。

①ホスト・ゲスト論分析枠組みの発展的検討
観光を周辺的外部の視点から捉え直すことでホスト・ゲストという二項対立の分析枠組みでは等閑視される周辺的外部の役割と影響を分析することで観光分析に新たな課題領域の提示

②周辺的外部の不可視化に基づく観光成立の仕組みにみる文化概念の検討
ホスト住民は観光文化の独占者として発言し、周辺的外部を不可視化する。それは観光成立の重要な仕組みであり、文化の所有について新たな理論的課題の明確化へとつながる。なお、地域への波及ということで述べれば、「観光依存型の経済の自立に関する検討基盤」を確立できた。観光に依存する島嶼部は経済の自立が大きな課題であるが、外部資本にも注目する本研究の視点は自立の可能性を巡る基盤を今後の広島県内の島嶼部の研究においても役立てることが可能である。

科研の最終申請書では、海を中心とした観光、島嶼であること、観光依存の経済構造の共通点からパラオと沖縄を研究対象とした。パラオは海を中心とする観光を主要産業とし、人口２万人の内４千人をサービス業に従事するフィリピン人が占める。加えて、日本、台湾、韓国の業者がパラオ人と組んでダイビングショップを開き、各国から来る観光客を受け入れ、三カ国合わせて 1500 名余りが働く。セックスワーカーとして中国人が主に台湾人に雇われ、日本人が案内する戦争犠牲者慰問ツアーもある。一方、沖縄は離島も含め本土資本が投入され、本土からの観光客を主対象とした、青い空と白い砂浜を象徴とする観光が形作られ、地元の人が観光産業に多く従事するようになった。現在は台湾、中国からの観光客誘致に注力し、華僑や留学生らがガイドや通訳、店員として働くようになっている。

論文等成果

論文

①「境域の人類学的研究に関する理論的検討　～台湾東部と八重山、韓国南部と対馬をめぐって～」『世新日本語文研究』5　1～22 頁、査読有、2013 年３月

②「つなぐ記憶／ずらす記憶～現在の八重山・台湾境域における越境の試みをめぐって」、上水流久彦、村上和弘、西村一之編『境域の人類学－八重山・対馬にみる「越境」』風響社、印刷中

③「はじめに－境域を問う意義－」、村上和弘、西村一之編『境域の人類学－八重山・対馬にみる「越境」』、風響社、印刷中

学会発表など

①「空間と場所のせめぎあい－八重山・台湾の境域をめぐって」第 30 回日韓・日朝交流史研究会（島根県立大学）、2012 年 7 月 10 日

②「外部化と内部化のための台湾―八重山の事例を通して」分科会：東アジアの境域をめぐる人類学―八重山／台湾、対馬／釜山を事例に、中四国人類学談話会（県立広島大学）2012 年 11 月 17 日

③「グローバリゼーション時代の地域間交流 ～沖縄県八重山を事例に」国際創新服務研討会（台湾・桃園創新技術学院）2012 年 12 月 21 日